

ろんдан 佐賀



佐賀大学
ダイバーシティ推進室副室長
荒木 薫さん

あらき・かおる 1979年、長崎県佐世保市生まれ。佐賀医科大卒。小児科医として県内の病院勤務を経て佐賀大学大学院医学系研究科に進学し医学博士号を取得。佐賀大のダイバーシティ推進室副室長、保健管理センター助教に就任し、大学内のダイバーシティ推進や学生のキャリア教育、教職員の健康管理などを担う。佐賀市。

先日、別の部署の女性が、生まれて半年ほどの小さくでかわいらしい赤ちゃんを抱え、私の声をかけてきた。「育児休暇を終えて来月から職場復帰します。フルタイムです。今日はそのあいさつにきました」と。私は思わず、「時短勤務を選択できなかつたの？」という言葉を口にした。彼女の職場はどうも忙しい。保育園のお迎えに間に合うのだろうか、最初から頑張つて後からきづくならないだろうかと、とうきに思ったからである。すると彼女は、「やっぱり早まりましたかね…」と不安そうな顔をみせた。みなさんは、どう声掛けをするだろうか?「こんな小さな子どもを預けるなんてかわいそう」「自分の時代は育休など取れなかつた」「あなたがそんなに頑張つたら、次に復帰する人がしんどくなるかもしないよ」。いろいろな回答があると思う。それはきっと、自分の今の立場や過去の経験・習慣で得た情報に基づくものではないだろうか。

今日はそのあいさつにきました」と。私は思わず、「時短勤務を選択できなかつたの？」という言葉を口にした。彼女の職場はどうも忙しい。保育園のお迎えに間に合うの

アンコンシャス・バイアス

高まっている。日本語で「無役割を果たしている。問題は、意識の偏見」と訳され、自分が持つ「無意識のバイアス」に気が付かないまま、この見方や捉え方の偏りのことであると決めつけてしまった。「偏見」と聞くとい悪いイメージを持つてしまうが、人間なら誰しも持つ優秀な「脳の省エネ」機能の一つだ。

自分が持つ「無意識のバイアス」に気が付かないまま、この見方や捉え方の偏りのことであると決めつけてしまった。しかし、この仕事への意図、周囲の協力、あり感謝してもしきれない。個々の事情は十人十色。本人は、本当にぜいたくな機会で、自分の意見をアウトプットできる場を設けて頂けたことを促してしまった。しかし、この経験を糧として、これからも、振り返ればたら

児童の両立は難しいといふ自分の考え方から、復職することができる。このような自分に対してもベースダウンの仕事への意図、周囲の協力、あり感謝してもしきれない。子どもの性格…さまざまなもののが絡み合って同じものはならも教育者として医師として、佐賀や大学のために精進していく

十人十色の事情に意識を

に復帰する人がしんどくなるに大量の情報を取得している。人間が1秒間に取得する情報は何と1100万件。脳はその膨大な情報を処理するには限らない。自分が持つている無意識のバイアスに気付く、時には自分の確信を疑う、決めつけや好みで発言していないかを常に意識することが大切だ。

冒頭の話に戻ると、私は育て、それに関連した多くの本や論文、新聞を読みあさった1年だった。付け焼き刃だと嘆きながらも、振り返ればたら

の判断を受け入れ応援するこど、もし壁にぶつかることがあればいつでも相談にのるし軌道修正も可能であることを思いました。さて、今回私が書く「ろんだん佐賀」は最後となる。1ヵ月半ごとにテーマを探して、佐賀や大学のために精進していく